桐の花

さおり

校門をはいると
おゝ桐の花が
雨に濡れた桐の花が
幾つも〳〵散つてゐる
見上げると
葉の間から薄い紫が見える
いつの間に咲いたであらう
此の木が桐の木である事も知らずに
此の木の下を毎日通つてゐた。

桐の花、桐の花
ゆうべの雨の中を
ひつそりと散つた桐の花
濡れた柔い頰を
大地の肌につけて
ひつそりと散つた桐の花
朝霧につゝまれて開けた唇
青い月光の中で結んだ夢
そのまゝの姿で散つてゐる。

そつと咲いて
そつと散つた桐の花
曙のほのかなその色
ふくよかなその胸は
泉のほとりに立つ少女のに似て
秘められた永遠の嘆きをかをる。
おゝ散つた桐の花
人影の見えない校庭で
一人しみ〴〵桐の花を見る。